連載エッセイ

新谷尚紀
民俗学者

第2回

政治・経済・信仰を生んだ稲作、邪を祓い霊力を補給する米

新米の季節です。普段何気なく食べているお米でも、この時期にはちょっと意識する人が増えるのではないでしょうか。値段や味も大切ですが、お米のもつ「力」についても目を向けてみてください。もっともっとお米も、そしてお酒も、味に深みが増すのではないでしょうか。

言うまでもなくお米は日本人にとって特別な存在です。それは単なる主食というだけではありません。稲作文化などと一口に言いますが、この国の成り立ちも、信仰も、すべて米づくりの上に存在してきたものだからです。

支配と権力を生み出した稲作

水田稲作は、紀元前10世紀後半に九州の北部で始まっていたことがわかりました。ただ、それが関東地方まで伝わる紀元前3世紀まで、なんと600年から700年もかかっているのです。なぜこんなにも途方もなく長い時間がかかったのでしょう。それは、狩猟漁撈（ぎょろう）採集を行ってきた人びとを、過酷な労働に強制的に結集させることが困難だったからでしょう。支配されることに人びとが抵抗してきたという歴史があるからです。それを乗り越えて人びとをまとめ、水田稲作を定着させていった地方の族長は、大きな組織力・結集力をもっていきました。稲米をつかんだ者が権力をもち王となったのです。3世紀半ばから6世紀末までの古墳時代というのは単なる巨大な墓の時代という意味ではなく、稲作とその農閑期も含めた持続的な労働力の結集を各地の首長たちが実現し徹底させていった時代だという点に歴史的な意味があるのです。

稲米は単なる食糧ではなく、それを支配することで政治の米、経済の米となり、大きな霊力のある祭祀（さいし）の米となっていきます。ある意味で王の象徴となったのです。品質のいい米を独占すれば権力を握り続けることができるため、支配者は米の品種・種籾を徹底して管理して領民に配り、収穫物を初穂として徴収するシステムを作り、権力を強化していきました。稲米の霊力を集め、再分配する者こそが支配者であったわけです。

稲と米が神社の祭祀の中心に

7世紀に入り、日本古代の天皇中心の律令国家の体制ができあがっていくと、天皇は太陽の神、稲作の神として天照大神を崇め、自らをその子孫として神格化させていきます。天武天皇と持統天皇の時代になると神社祭祀が国家的な規模で整備されていきます。その中心は稲や米に関するものでした。

9月にはその年の初穂を天照大神に奉納する神嘗祭が行われ、神祭りがない忌みの意味をもつ神無月をはさんで、11月には天皇自らが初穂を食す新嘗祭が行われます。この二つは、律令の時代から今に続く、宮中で最も重要な祭祀の一つです。古式で炊いたご飯を奉納し、神様に続いて天皇も食べることで霊力を更新します。

稲米に関係する祭りは、庶民のレベルでも全国各地の農村に見られます。特別な信仰心をもたなくても、稲米への畏敬は誰にも自然に備わっています。1年に一度だけ採れる米のサイクルが、自らが一つ歳をとることと重ね合わされ、米を魂の象徴と見る考え方が日本人の心には深く根付いているのです。

日本人に根付く稲魂

このように日本では、稲米は権力の象徴であり政治・経済の中心であるとともに、強い生命力、霊力があり、悪霊、地霊、邪霊を鎮める力があると信じられてきました。この「稲魂」という観念は、東南アジアの国々など、稲作文化を形成した社会においても同様に見られます。前回、貨幣とは霊的な力をもつケガレを吸引する道具であり、自らの祓え清めのためにお賽銭として投げるのだと説明したところ、「目からうろこ」との感想をいただきましたが、米にもこの「吸引」の力があるのです。

餅・酒・粥。邪気を祓うパワー

餅や酒にも米の霊力は宿っています。つき固められ、醸されて、むしろパワーアップしていると言ってもいいでしょう。だからお正月をはじめ、1年の大事な行事や節供の一つひとつに、形を変えて餅や酒はつきものなのです。

鏡餅、菱餅、よもぎ餅、柏餅、芝餅……。3月の白酒、5月の菖蒲酒などは、子どもにも飲ませていました。粥もよく登場します。年が明けると7日に七草粥(白粥)、小正月には小豆粥(赤粥)など。粥の中には団子も入ります。季節ごとの行事食には、その時節の気候に即した鋭気を養い、その時期流行る病から体を守る生活の知恵が込められています。そして悪霊を吸い取って食べてしまうことで邪気を祓います。

こうしたハレの餅や酒は充電みたいなものです。霊力を補給し、生命力を強化して明日からまた精一杯働けというわけです。普段は我慢してたまに食べ、飲むからことさらにおいしいのです。

美保関の美保神社や出雲の佐太神社の神事では、今もお供えの酒を醸して造ります。美保神社では頭屋さんの造った甘酒を飲ませてくれます。米が自然の力で液体になり、さらにそれが人を酔わせ、楽しくさせたり何かが乗り移ったようにさえさせる。そんな不思議な力を蓄えた酒は神事につきものです。だけど、私はアルコールに関しては、申し訳ないけど米ではなくて麦のほうなんです。日本酒は、むかし失敗してから飲まなくなりました。「お前、日本酒も飲まずに神様の祭りを調査するなんておかしいよ」とよく言われましたが、日本酒は足にきますからねえ。

箸食と手食

日本には、必ず箸食と手食の両方があります。ご飯もそう。お茶碗によそったご飯と、おにぎりや握りずしを考えてみてください。手食の伝統は長く、現代でさえもコンビニの中に生きているんですよ。神社のお下がりなんかは、箸でつまんだら失礼になります。お手盆っていって手で取らなくてはならない。先ほどの美保神社の神饌のイカ昆布も甘酒もお手

盆で受け取ります。

箸は後になって中国からきましたが、中国や韓国では金属の箸で、洗って何度もいろいろな人が使います。日本人はそれを嫌い、あえて割り箸を用いたり、マイ箸をもったりしてきました。自己確認が箸にある。わるく言えば、せこい文化ですかねぇ。マイ箸、マイ茶碗、マイ湯呑み、私ももっています。せこい人間の代表ですよ(笑)。

田植えは神聖で厳粛な神事

田植えに関する行事は、日本各地に残っていて、国の文化財になっているものだけでも40を超えています。とくに西日本、中国山地には、祭りのようにして田植えをする行事があります。田植えはある意味辛いものだから、囃(はや)し歌いながらみんなでやる。男たちが笛や太鼓で囃し、美しい飾り鞍をつけた牛が代掻きをし、着飾った早乙女たちが田に入り、苗を植えていく。そうやってみんなでやれば、早く楽しく植えられますからね。

この時期になると山の神が里に下り、「サンバイ」と呼ばれる田の神になって農作業を見守り、豊作をもたらします。田の神は女性が好きだし、田植え自体が神聖な行事なので、田植えをするのは女性じゃなくちゃいけないんですよ。最近は田植え機になっちゃいましたから、神様も冗談じゃないって思ってるんじゃないですかね(笑)。お昼やひと休みのときにはたくさんごちそうを出し、酒も飲ませる。働ける程度にね。小さな規模の田植えでも、これはつきものでした。これもハレの食事、充電です。さあ、また働こうって感じです。

広島県の北広島町壬生(みぶ)という地区に、西日本最大の田植えの行事が今も残っています。「壬生の花田植」と呼ばれるこの行事は、ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。実は私の生まれ故郷でして、子どもの頃から見ている私には何も珍しくはないのですが、平安時代の『栄花(えいが)物語』にもそのような光景が描かれています。中国山地では中世(鎌倉〜室町時代)から続くと言われており、この田植行事は民俗学的にも重要なものです。今、うちの大学院生ががんばってなかなか立派な論文を書いているところです。

田植えの季節は初夏ばかりではありません

あれ、季節はもう秋だというのに、田植えの話ばかりしてると思っていませんか？　ところが、こうした、田植えに関する行事は、土地によっては秋にも行われ、そして東日本では正月や小正月に行われるところが多いのです。もちろん、その場合は実際の田植えは行わず、舞いや踊りやしぐさで田植えを再現する、それは「田遊び」と呼ばれるものです。

秋だったら収穫祭をすべきと思われるでしょう。もちろん収穫祭もあちこちで行われますが、収穫はもう結果にすぎない。田植えはその年の稲作を左右する、より神聖で厳粛なもの、大変緊張するものなのです。柳田國男や折口信夫も、田植えはただの労働ではなく、豊作を願い田の神を祭る神事だと言っています。だから年の初めに田植えの行事をするところがとても多い。正月は1年で一番大切な、よい運気を呼び込まなくてはいけないときですから。秋の田植祭は、田植えの緊張をもう一度演じることで、あのときの祈りが通じたと、その年の稲作を振り返り、あらためて田の神に感謝をすることになるのです。大変だったな、あのときね、たとえば野球で9回満塁で逆転ホームランを打ったのはお前だったよな、なんて試合後の打ち上げで振り返るのと一緒ですよ。

満天の星空を眺め月の満ち欠けも感じるような暮らし

実は、私は4年前にこの花田植の壬生の町に古い町家を買いました。そこに図書室を作って夏の間は2カ月、一人で原稿を書いたり、気ままな生活を楽しんでいます。自炊もしますよ。安心してください、私はもちろんご飯党です。広島県の芸北(げいほく)地方の高原地帯で採れる米を買って、朝はたまごかけご飯で食べるのが大好き。玄界灘の鯵の干物や、出雲の十六(うつぶる)島岩海苔、浜田の板わかめ、そして漬物上手な親戚の人からのお手製の梅干しやらっきょうがあれば最高。そして夜はビールがあれば極楽。もう仕事する気なんかなくなっちゃう。小さな中古車で農村をめぐってみれば、一見むかしと変わらぬような、自然のリズムと合った生活をしている人たちに出会う。東京では忘れていた満天の星空を眺め、月の満ち欠けも感じるような暮らしが、私にとっては充電。霊力を補給し、秋からはまた大都市東京に戻って精一杯働こうと思うわけです。

新谷尚紀 しんたに・たかのり

民俗学者。国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授、國學院大學教授。現在、國學院大學大学院と文学部で民俗学の後継者育成に努めている。『民俗学とは何か――柳田・折口・渋沢に学び直す』『氏神さまと鎮守さま　神社の民俗史』など著書多数。